

*総合評価について

番号	機関名	課題名	研究期間	研究概要	総合評価	評価委員コメント	委員コメントに対する研究機関の回答・考え方等
1	農林総合研究センター 農業試験場	いしかわ園芸オリジナル 品種育成研究	H23~27	石川県における園芸作物オリジナル品種の育成を目的として、フリージア及びナシの新品種育成を行う。また、新手法としてDNAマーカーを利用して、中島菜のネコブ病抵抗性系統の育成を行う。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・特にフリージアに関しては市場で一定の評価を得、更なる要望に応える研究を進展させているので大いに評価できると思う。 ・重要な課題で今後とも継続すべき。具体的な成果がもっと出るように期待している。 ・県の花としてもいいのではないか。 ・新品種が確実に増えており今後期待したい。 ・石川県のブランドとなる良質な品種を育成してほしい。 ・フリージア、なしに関しては着実に進捗していると感じた。 ・(なし) ”酸味少ない” のが気に入った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・平成28年度からの新規課題「いしかわ園芸オリジナル品種ステップアップ研究」において、消費者や流通業者の評価を聞きながら、石川ブランドを目指した新たなフリージア品種やナシ品種の育成に取り組んでいる。
2	農林総合研究センター 農業試験場	石川のフリージアシリー ズ生産技術の確立	H25~27	県内外の需要に対応できる産地を育成するため、12月~3月連続出荷技術やウイルス病対策などの技術開発を行う。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・既に石川県の代表品種と言える。 ・冷蔵処理技術により100万本も夢じゃない、今後期待したい。 ・連続出荷技術現地へ導入するにあたってコストと作業性を考える必要があると思う。 ・ウイルス病対策に関して期待しているので、今後の展望について知りたい。 ・色むらの原因はウイルスだけではなく等で、有効性の検証が必須である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・水稲大規模経営体を普及対象とすることから、これらの農家が保有している米の保冷庫を、コメの搬入がない期間に有効利用することでイニシャルコストの低減を図る。 ・4月以降開花の作型では虫害(アザミウマ)により色むらが発生する可能性もあるが、本県は12月~3月開花の作型であり、ウイルス対策を中心に色むら対策を考えている。また、この作型で発生する色むらの主原因ウイルスがフリージアモザイクウイルス(FreMV)であることを特定したところであり、今後、感染経路を突き止めて、防除方法を検討していきたい。
3	農林総合研究センター 畜産試験場	生体内卵子吸引と体外受精による効率的な牛の増産技術の確立	H25~27	従来からの体内受精卵だけでは農家の需要に応えられないため、生体から卵子を吸引し、体外受精を行う技術を実用レベルに確立し、供給可能受精卵の増産を図る。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・成果の具体性に乏しいが計画の重要性から考えると長期的視野が必要と考える。 ・期待した成果が上がらなかったのは残念だが、問題点を検討し、次に進んで欲しい。 ・”能登牛1,000頭体制”実現のため研究継続願いたい。 ・遺伝子検査では多精子受精卵の検出率が悪いのでより改善を行っていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も研究を継続して行っていき、受精卵の増産をとおして、能登牛の増頭に寄与していきたい。
4	農林総合研究センター 畜産試験場	未利用資源を活用した乳用牛の免疫機能向上試験	H25~27	近年の乳用牛は、分娩後のエネルギー不足等により繁殖機能の低下や周産期病の発生が問題となっている。そこで、県内で発生する食品製造副産物等の未利用資源を給与することで、その機能性成分によって免疫機能を高める効果を検証する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ある程度の効果は認められたが原料の安定供給に課題が残る。 ・ワイン粕だけでは限界がある。 ・量の確保に問題あり、普及は困難と推察する。 ・この研究で得られた成果が食品製造副産物の飼料化という食品リサイクルにつながるよう期待する。 ・食品のリサイクルはコスト面でも非常に課題が多いがやり方次第ではうまくいくとも思うので頑張してほしい。 ・不正転売で問題となった食品廃棄物を対象として検討してはいかがか。 ・農家にとっては仕事の量が多くなりたいたいの事、今後も改良の余地あり。 ・免疫機能向上の評価は、より客観的に、より多面的に行う必要があるという印象を持った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワイン粕の供給量については、県内のワイン会社が新品種の導入のため作付の拡大を検討しているほか、平成27年度開業の輪島に続き、金沢にもワイナリー建設を予定していることから、供給量は増える見込みであり、量の確保は期待できる。 ・ワイン粕のみならずブルーベリー、茶殻等の利用も効果的と考えられ、食品製造副産物の飼料化はエコフィードとして国が推進する事業であることから、今後も積極的に取り組んでいきたい。 ・サイレージ調製については普通に農家でやっている作業であり、給与に係る労力についても、それほど仕事量が増えるということはない。 ・今秋、実証を行う際には、今回の評価項目だけでなく、受胎状況、周産期病や乳質等も調査して多面的評価を行いたい。
5	農林総合研究センター 林業試験場	県産スギ材接着重ね梁の長尺化・高品質化技術の開発	H23 ~ H27	県産スギ材の利用を促進していくために、公共建築物等の大空間にも対応できる長尺の梁・桁をスギで製造することを検討した。このため、スギ接着重ね梁の確実な長尺化(たて継ぎ)技術を開発するとともに、長尺化した場合の各種強度性能を明らかにした。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・各評価法で接着重ね梁の特性が明らかとなっている。今後使用方法などについて具体的な指針を出せるように検討してほしい。 ・原料調達も考えてどこでどう利用してもらうかを考える必要がある。 ・高級材として売り込めるかどうか。 ・成果自体は評価できるが普及には問題が多く残る。 ・利用促進を行政部局との連携を進めていくべきと感じた。 ・若木である間伐材を寄せ集めたところで疑問である 	<ul style="list-style-type: none"> ・使用方法、使用箇所としては、公共建築物等を想定しているが、一般住宅にも活用可能と考えている。 ・接着重ね梁は、無垢材、集成材に加えて新たな選択肢の一つとして位置付けており、無垢材に近い質感を持ちながらも、より低価格であるところを売りにしたい。 ・利用促進については、県庁の部局横断組織である石川県産材活用推進プロジェクトで各部局の物件で使用していただけるよう働きかけるほか、県木材産業振興協会や県木造住宅協会の講習会などでも成果を普及していきたい。 ・接着重ね梁の原料となる柱材は安定的に生産されており、強度性能の明確な間伐材を用いるため、支障はないと考える。